

Writing Support Center News Letter

ライティングサポートセンターニュースレター

No.007 発行日：2025年3月27日

ライティングサポートセンター・ニュースレターは、当センターの活動を、先生方により知っていただき、ご活用願うこと、学生に向けて利用を促していただくことを目的に発行しています。

巻頭言

ライティングチューターが育つ場所

島村 健司 ライティングスーパーバイザー

2018年に本学の全学舎で展開をはじめたライティングサポートセンター（以下WSC）は、学生のアカデミックライティング能力向上を目的としています。この目的に加えて、学生が主体的に学ぶ姿勢を支えることが重要な柱となっています。このようなところから、当然ながら主役は相談に来る学生です。また、彼らを支援するライティングチューター（以下チューター）ももう一方の主役です。ここでは、チューターが育つ過程の一端をご紹介します。



学生とチューター、相談者と対応者という、この二者間から生まれるダイナミズムとともに、チューターらが場を共有して経験を重ね合わせていくことが、より質の高いWSCをつくりあげてきました。しかし、学生の考えを引き出し、学生自らが問題を解決できるようにいざなうチューターが一朝一夕に育つわけではありません。採用されたばかりのチューターは、意気込みを感じさせながらも不安が先行するようです。新規採用者には、WSCの開室が始まる前に採用時研修を受けてもらいます。業務の仔細やアカデミックライティングの基本、模擬の相談対応と、おおよそ7時間ほどの研修です。

その後、開室期間に入って現場研修が始まります。ここでは、WSCで一定の経験を積んだ博士後期課程以上のチューター・リーダー（以下リーダー）が主となって研修をすすめます。WSCで基軸とする「相談対応の手引き」の読み合わせからはじまり、相談対応の見学、経験者が傍らにつく見守り対応を経て、独り立ちをします。この間、WSCで蓄積した資料（相談対応に用いるレポート見本や相談対応の記録など）を把握して場面に応じて使えるような研修や、他者が一見してわかるように相談記録を要領よくまとめる研修、そのほかWordやPowerPointなどの基本的な使い方のノウハウなど、現場で受ける研修は、相談対応以外にも実に多様です。そうして、開室から2か月ほどすると、新規採用者は、経験者を頼りながらも、一通りのチューター業務をこなしてくれるようになります。しかし、業務がこなせるようになって、より効果的な相談対応の方法を考えたり、対応の際に必要な資料を検討して作成したりと、すべきことは尽きません。チューターそれぞれの専門分野やそれぞれが所属する研究科を越えて、アカデミックライティングという観点とこの観点に基づく相談対応、チューター業務全般を見なおし、更新をはかっていきます。

この現場研修で軸となるのが、先述したリーダーです。リーダーには、昼休み時間帯に実施している講習会での解説や、教員から依頼があれば授業実施教室に赴いておこなう出張講習の講師のような役割もしてもらっています。リーダーであるからといって、チューターに対して一方的にWSCでの業務をレクチャーしていくわけではありません。リーダーもさまざまなレクチャーをしていく過程で、どうすれば確かにチューターの理解を得られるのか、その理解が効果的な実践につながるのかを、チューターから学びとっていきます。

リーダーもふくめたチューター全員には、学期末に「成長度評価」に協力してもらっています。「成長度評価」は、ループリック形式で自身の到達地点を計測してレーダーチャートで視覚的に伸びを確認できる設計です。また、チューターとしての成長度をはかる評価項目が大学院生としての役立ち度をはかる評価項目と関連し、チューターの仕事が大学院生としてどう役立ったかをはかってもらえるような仕様になっています。たとえば「相談者への問いかけ」（チューター）は、「問う能力の向上」（大学院生）という具合に項目を読み替えるようにしてあります。成長を自覚してもらうような試みです。

このような試みもあってか、WSC設置当初からチューターをしてきていたリーダーの岩間智昭さんから、WSCでの経験を生かした文章を発表したいといううれしい申し出がありました。この申し出を受けてWSCでかたちにすべく検討した結果、今回、この『Writing Support Center News Letter』に掲載するに至った幸いです。彼が報告してくれたのは、WSCの相談対応でもっとも利用することの多い「レポート書式見本」という資料を刷新する作業にとりくんだ軌跡です。チューター個人でつくりあげるのではなく、意見を出し合い、協力しながらかたちにしていくWSCのあり方を汲みとっていただければ幸いです。また、彼の報告からWSCのとりくみを知ってもらうとともに、ぜひ、チューターが成長した成果としてご一読ください。

ここには、WSCで大学院生がチューターとして成長する一端を記しました。このようなチューターの育つ場所がWSCです。ぜひ学生にご紹介ください。また、レポート課題やゼミ発表での連携では、ご担当の先生からあらかじめ課題の内容や発表の段取りや形式などをお知らせいただくため、それらの相談で訪れる学生から聞き取る際に齟齬がなくなったり、チューター側も備えができたりして効果的です。さらに、レポートにとりくむための方法を、構成の仕方やテーマの絞り方、引用の仕方など、テーマ別に整理した出張講習もご活用ください。そのほか、ご質問やご要望など、お気軽なお寄せください。



Ryukoku University

Writing Support Center News Letter

No.007

【編集】

ライティングサポートセンター
(教学企画部)

E-mail: wsc@ad.ryukoku.ac.jp

担当：教学企画部 栃木、矢守

アカデミック・ライティングの相談に資する教材作成の一事例 —龍谷大学ライティングサポートセンターにおける新版「レポート書式見本」の作成—

岩間 智昭

キーワード：アカデミック・ライティング／ライティング・センター／教材作成

1 はじめに

近年、全国の大学において、学生のアカデミック・ライティングスキル向上を手助けする機関（ライティング・センター）の設置が増加している。本稿では、龍谷大学ライティングサポートセンター（以下、WSC）が、学生からの相談に対応する場面において重用している、見本レポートに関して報告する。本報告が、全国の大学におけるアカデミック・ライティング教育、そしてライティング・センター運営の参考に供することを目指す。

1.1 龍谷大学ライティングサポートセンターの概要

文部科学省の調査によると、「ライティング・センター等、日本語表現力を高めるためのセンター等の設置」に取り組んだ大学は、2018年度の90校（11.8%）から、2022年度には114校（14.6%）へと増加している（文部科学省、2024）。龍谷大学では、WSCの前身が2007年4月より本格稼働しており（以下、前身の時代）、2018年4月に現行の形となった⁽¹⁾。

佐渡島・太田（2013）は、早稲田大学におけるライティング・センターを支える理念として、（1）ライティングを過程において始動する、（2）領域を横断して指導する、（3）「紙を直す」のではなく「書き手を育てる」の計3点を挙げている。WSCも、おおよそこれらの理念に則って運営がなされている。対面での個別相談を基本としており、コロナ禍により一時的にオンラインでの相談に移行したものの、2022年度以降は対面とオンラインとの併用という形

で、「書くこと」全般に関わる相談を受け付けている。

1.2 「レポート書式見本」の利用

相談に際し、チューター（本学大学院生）は、WSC独自に作成した資料を用いる⁽²⁾。その中の一つに、「レポート書式見本」と題する資料がある。当該資料は、前身の時代に作成された。APA書式に準じた引用・参考文献等の記載方法を案内するに留まらず、その書式に基づいたレポート（以下、見本レポート）を備えていた⁽³⁾。チューターは、本資料を用いて、書式の説明や、序論・本論・結論で書くべき要素のレクチャーなどを行う。また、個別の相談のみならず、一度に多人数の学生を相手にレクチャーをする各種講習会の資料も、見本レポートの書式および内容が基となっていた。なお、不特定多数の学生を対象とした2023年度の講習会の実績は以下の通りである（丸括弧内は参加人数）。

- ・5月24日「レポートのタイプを知る—レポートを書き始める前に—」（55人）
- ・5月26日「レポートの実際を知る—論証とは—」（30人）
- ・11月6日「レポート・卒業論文に役立つ資料の探し方」（9人）
- ・11月8日「卒業論文・卒業研究をスムーズに作成するために～論文の基本、再確認！～」（16人）
- ・11月10日「引用の仕方と注・参考文献の書き方」（16人）
- ・11月13日「卒業論文・論証型レポートをスムーズに作成するために～論文の基

本、再確認！～」(7人) ※大宮学舎のみで実施

このほか、高大連携推進室や学生部などと連携した講習会・研修や、教員と連携して行う「出張講習」も開催した⁽⁴⁾。

1.3 旧版「レポート書式見本」の課題

「レポート書式見本」は、WSCの核となる資料であった。しかし、前身の時代に作成されたために、見本レポートの参考文献に示したURLのリンクが無効となっていたり、参考とする情報が古くなっていたりと、利用に際し不都合が生じていた。そこで、有志を募り、ワーキング・グループ(以下、WG)を立ち上げて新版「レポート書式見本」を作成するに至った。本稿では、筆者を含むチューター、およびスーパーバイザーである島村健司による見本レポート作成の経過を報告する⁽⁵⁾。

2 旧版「レポート書式見本」の概要

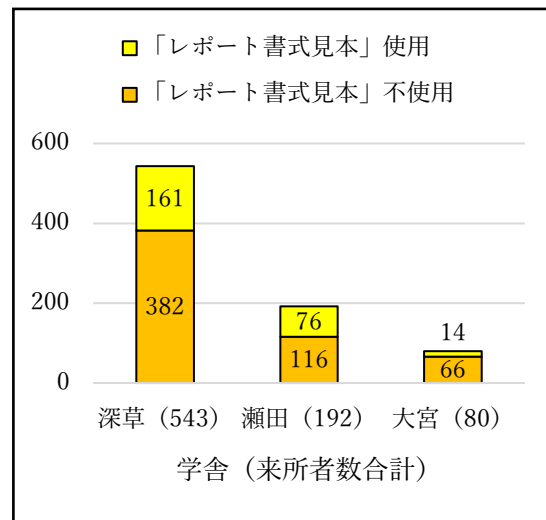
2.1 見本レポートの内容

先述の通り、旧版の「レポート書式見本」は前身の時代に作成された資料である。書式の注意書きに沿った具体例として付けられた見本レポートは、「静岡県三島市の環境に対する住民意識と水一マイバッグ運動の起点」と題する「論証型」のレポートである⁽⁶⁾。注および参考文献を除くと1,600字程度の文量で、なぜ静岡県三島市のレジ袋辞退率が、全国平均より高いのかを問いとし、三島市においてマイバッグ運動が成功していること、そしてその背景には、三島市民が水に対する強い環境意識を有していたことを仮説とした。

2.2 利用状況

2023年度におけるWSCへの「来所者数」は、深草学舎・大宮学舎・瀬田学舎の三学舎合計で815人であった。その内訳は、深草543人、瀬田192人、大宮80人であった。

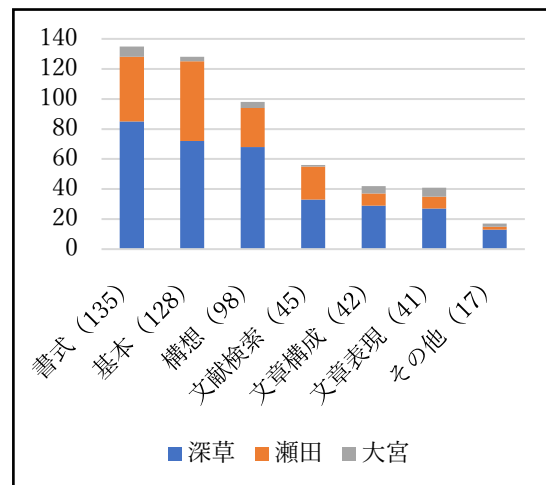
そのうち「レポート書式見本」が用いられたのは、深草161人(29.65%)、瀬田76人(39.58%)、大宮14人(17.5%)であった【図1】⁽⁷⁾。また、「レポート書式見本」使用時の相談内容は「書式」の確認が最も多く(135人)、レポートの「基本」の確認(128人)、「構想」(テーマ)の設定(98人)が次いで多い【図2】⁽⁸⁾。



【図 1】学舎別来所者数比較表

上段「レポート書式見本」使用者数

下段「レポート書式見本」不使用者数



【図 2】「レポート書式見本」使用時の相談内容

下段から、深草・瀬田・大宮での使用者数

なお、大宮での利用率が特に低い理由としては、当該学舎を拠点とするのが文学部の3・4年次生であることが挙げられよう。「レポート書式見本」は、【図2】の通り書式を始めとしたレポートの基本事項を押さえる際に用いられる傾向にある。すなわち、本資料が比較的初年次生を相手に用いられる一方で、3・4年次生には適さない場合が多いのである⁽⁹⁾。

3 新版「レポート書式見本」の作成

3.1 作成までのプロセス

2023年10月より、新版「レポート書式見本」作成のWGが本格稼働した。前もって有志がチューターより募られた結果、筆者を含む4人が参加した。そこに島村が加わり、特に新版「レポート書式見本」に付録される見本レポートの新規作成に注力することとなった。この作成に際して前提としたことや、進行の各概要は【表1】のとおりである。

【表 1】見本レポートの前提・段階・概要・日程

【前提】			
・既存の「レポート書式見本」の体裁を満たすように考える。 ・体裁とは、序論・本論・結論の役割が反映されていること、引用方法の種類と出典のバリエーションが踏襲できていることをさす。 ・ほかに既存のもの以上に「注意事項」の具体例となっていることが望ましい。			
進行の段階		概要	日程
1	構想	・WG 各人がレポートのテーマ、問い、主張を考える。	10/2 }
2	構想のすり合わせ	・WG 人が考えてきた構想のプレゼンテーションを行う。 ・プレゼンテーションでは、資料のめどが立っていること、「前提」を満たしていること、問いの重要性が説明できること、これらを必須事項として盛り込む。 ・プレゼンテーションとその質疑応答を経て、1つに絞る。	10/23 }

3	資料収集	・2の段階で確定した構想に基づき、WGの成員で各種の資料を集める。 ・収集した資料をGoogleドライブで共有する。 ・「前提」条件を満たせると判断できる程度に資料が集まれば、3の段階を終了とする。	10/23 }
4	作成	・構想、テーマに基づいて、WG各人がレポートを執筆する。 ・分量は既存のもの程度、注や引用・参考文献の様式も既存のものに準じる。	11/6 }
5	作成されたレポートのすり合わせ	・WG各人のものを確認し、1つに絞る。 ・1つに絞ったものを推敲する。 ・推敲した内容をすり合わせて、たたき台を完成させる。	12/15 } 1/17

チューター各人がテーマや構成の案を持ち寄り、10月23日にオンラインでプレゼンテーションを開催した。その際には、旧版「レポート書式見本」のように、序論・本論・結論の役割が反映されていることや、引用方法の種類と出典のバリエーションが踏襲できていることが求められた。

プレゼンテーションでは、「日本における子どもの貧困対策」「日本の英語教育における英語母語話者信仰の非合理性」「平安・鎌倉期歌人の「推し活」—鴨長明『無名抄』を中心に—」など、多様な案が提出された。投票の結果、筆者が提案した「公共図書館の新たな形—岐阜市立中央図書館を事例に一」が採用された。本案は、岐阜市立中央図書館が、改築にあたり、なぜ「滞在型図書館」へと変貌したのかを問うものであった⁽¹⁰⁾。そして、「公共図書館への新たなニーズに応えるため」「旧図書館が抱える課題を解決するため」とする仮説を立てていた。

その後、書式のバリエーションを示すためにも、書籍・論文（英文含む）・新聞記事・インターネットといった多様な参考資

料を合同で収集し、それらを用いてチューター各人でレポートの執筆に取り組んだ。その際、島村より、次のような2点の指摘があった。一つは、草案の段階では内容の新規性に乏しく、旧版とは異なる「報告型」に陥る可能性のあること。もう一つは、岐阜市立中央図書館を取り上げる固有の意義を盛り込む必要があることである。これらの点に留意しつつ、約1ヶ月間で作成が進められた。

3.2 新たなレポート見本の内容

チューター各人の成果（草稿）を照合した上で推敲を重ね、WSCの2023年度閉室日となる2024年1月下旬に、新たなレポート見本の叩き台が完成した。課題となっていた「内容の新規性」および「取り上げる固有の意義」については、岐阜市中心部における観光政策という視点を組み込むことで解消された。具体的には、岐阜市立中央図書館の「滞在型図書館」への再開発が、利用者の増加および人的交流の活性化を生み出し、2007年より始動した「岐阜市中心市街地活性化基本計画」（岐阜市、2023）に指定されたエリアにおける観光面への貢献に繋がることを論じる、といった内容である。

その後、2023年度のWSC閉室に際して開催された会議（1月22日）にて、チューター全員から承諾を得たことで、正式に新版「レポート書式見本」の完成に至った。旧版と見本レポートの内容を比較したものが【表2】である。いずれの内容も、専門性を過度に高めず、広く学生に納得して読んでもらえるよう意識したものとなっている。なお、書式は旧版「レポート書式見本」と同じくAPA書式（新版では第7版）に準じており、その注意事項は島村が作成を担当した。

【表 2】レポート見本（旧版・新版）内容比較表

		旧版	新版
序論	対象	静岡県三島市におけるマイバッグ運動	岐阜市立中央図書館の「滞在型図書館」への改築
	問い	なぜ、三島市におけるレジ袋辞退率が、全国平均と比べて高いのか。	岐阜市立中央図書館は、観光面でも期待を寄せられている。どのような背景があるのか。
	仮説	三島市においてマイバッグ運動が成功した。その背景には、三島市民の住民意識が水と深い関わりを持っているから。	「滞在型図書館」に生まれ変わったことで、地元にも留まらず観光面にも貢献する人的交流の結節点となっているから。
本論	情報整理	①清流と強く結びついた産業の歴史。 ②二度にわたる、石油コンビナート建設阻止の市民運動。	①岐阜市中心地の発展の歴史。 ②岐阜市センターゾーンの観光立地。 ③「第三の場」となり利用者数が増加。
	考察	水辺環境で育まれた生活文化が、住民意識の根底にあり、石油コンビナート建設阻止に繋がった。この意識が起点となり、マイバッグ運動の成功にも繋がった。	「滞在型図書館」となった岐阜市立中央図書館は、観光施策上の要衝である司町周辺の人的交流を促進する。岐阜市中心部の活性化に貢献していく姿勢が見える。
結論	結論	序論・本論のまとめ。	①序論・本論のまとめ。 ②今後の課題：観光面での貢献について、具体的なデータを収集し検討する。

4 おわりに

本稿では、筆者も参加したWSCでの新たな教材作成について、そのプロセスや内容を開示した。他大学におけるアカデミック・ライティング教育の、あるいはライティング・センター運営の一助となることを目的とするものであった。

今後の課題としては、チューターへの新版「レポート書式見本」を用いた講習方法の周知および研修の実施や、学生や教員を含む利用者からのフィードバックを踏まえた教材の更新が挙げられよう。相談者の「書くこと」に関する悩みが少しでも解消されるよう、資料内容および相談方法の両

面に対する、絶え間ない検証が求められる。

注

- (1) 2011年度時点では、「日本語表現力を高めるためのセンター等の設置」に取り組んだ大学が45校に留まっていた（文部科学省、2013）。龍谷大学における機関の設置が、全国的にも早期の取り組みであったことが分かる。
- (2) アカデミック・ライティングに関する独自の教材作成については、大阪大学や愛知淑徳大学における事例の報告が既になされている（堀・坂尻、2015）（勢力、2022）。
- (3) 「レポート書式見本」で示される書式の注意事項は、井下（2022）の内容を基としている。
- (4) 不特定多数の学生を対象とした講習会は、定期的に所定の会場で実施するもので、学生はポータルサイトで参加を申し込み、対面かオンラインで参加をする。出張講習は、教員からの依頼で、チューターまたはスーパーバイザーが教室に赴き、講義の時間を用いてレクチャーをするものである。
- (5) WSCの組織体系は、チューター、チューター・リーダー、スーパーバイザーから成る。チューター・リーダー（WSCで一定の経験を積んだ博士後期課程以上の者）は、チューターの勤怠管理や現場研修をする役職で、スーパーバイザーは現場全体の統括を担う。チューターおよびチューター・リーダー（本稿ではチューターと一括で表記）は大学院生が、スーパーバイザーは島村が該当する。
- (6) 石井（2011）は、レポートが「報告型」と「論証型」とに大きく分けられると述べる。前者を「ある特定の話題に焦点をあてて、参考資料を調べ、整理して解説するもの」（p. 24）で、後者を「あるテーマ（論点）について、必要であれば複数の資料を調べ上げ、自分の意見はどうなのか」（p. 24）を論じるものと規定している。
- (7) 対面相談は一枠当たり45分間、同様にオンライン相談は60分間であるため、それらを区切りとして算出している。
- (8) WSCでは、相談終了後にチューターが所定の書式でその相談の概要をサポートシートにまとめている。これは、相談者からの質問とチューター側のアドバイスを中心としたもので、【図2】はそのサポートシートを基に筆者が作成した。
- (9) 2023年当時、深草キャンパスを拠点としたのは、文学部・心理学部の1・2年次生、経済学部・経営学部・法学部・国際学部・政策学部の全年次生である。同じく瀬田キャンパスを拠点としたのは、先端理工学部・社会学部・農学部の全年次生である（大学院については略述）。
- (10) 「滞在型図書館」の定義については植松（2014）に詳しい。また、岐阜市立中央図書館を対象とした研究には、松本（2022）や、館長である吉成信夫の報告などがある（吉成、2017a）（吉成、2017b）。

参考文献

- 石井一成（2011）『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社
- 井下千以子（2022）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』（第3版）慶應義塾大学出版会
- 植松貞夫（2014）『図書館施設論』樹林房
- 岐阜市（2023）「第1期岐阜市中心市街地活性化基本計画」<https://www.city.gifu.lg.jp/info/machizukuri/1008035/1008037.html>（2025年1月20日閲覧）
- 佐渡島紗織・太田裕子（2013）『文章チューティングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- 勢力麻未（2022）「ライティングサポートデスクにおけるセッションの工夫—アクション・リサーチによる補助教材作成および活用を例として—」『愛知淑徳大学初年次教育研究年報』（7）、pp. 5-7
- 堀一成・坂尻彰宏（2015）「大阪大学におけるアカデミック・ライティング教育の実践と教材作成」『大阪大学高等教育研究』3、pp. 27-32。
- 松本恭幸（2022）「サードプレイスとして地方図書館が果たす新たな役割：岐阜市立図書館、まちライブラリーの取り組みを通し

て」『メディア情報リテラシー研究』3

(2)、pp. 82-88

文部科学省 (2013) 「大学における教育内容等の
改革状況等について (平成23年度) 3 調査
結果 (1~4)」 [https://www.mext.go.jp/a_](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1341433_03.pdf)
[menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1341433_03.pdf)
[/afieldfile/2014/03/10/1341433_03.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2014/03/10/1341433_03.pdf)
(2025年1月13日取得)

文部科学省 (2024) 「大学における教育内容等の
改革状況について (令和4年度)」 [https://](https://www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_daigakuc01-000038093_1.pdf)
[www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_dai](https://www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_daigakuc01-000038093_1.pdf)
[gakuc01-000038093_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241011-mxt_daigakuc01-000038093_1.pdf) (2025年1月20日
取得)

吉成信夫 (2017a) 「子どもの声は未来の声〜本
がひととまちをつなぐ〜」『図書館界』69
(2)、pp. 94-102

吉成信夫 (2017b) 「図書館は公園である」『館
灯』(55)、pp. 1-12

付記

新版「レポート書式見本」の作成に際し、共に
尽力したチューター3名 (神林声氏・東野空氏・
松田剛氏) に感謝します。

また、資料作成の総括指揮を担った島村健司氏
には、本稿作成に際しても多分のご厚意を賜りま
した。この場を借りて深く謝意を表します。